

# *The Arundel Harington Manuscript* における friendship について<sup>1</sup>

佐藤 達郎

*The Arundel Harington Manuscript* (以下『アランデル・ハリントン写本』)は、テューダー朝の貴族、ジョン・ハリントンとサー・ジョン・ハリントン親子によって編集された手稿本の詞華集である。父ジョン・ハリントンによって1540年前後に編集がはじめられたこの詞華集は、その後、息子に引き継がれ、その編集は1600年代初頭まで継続したと推定されている(AH, Introduction 14)。親子二世代にわたり収集されたこのアンソロジーには、同時代の詩330編が手書きによって筆写されており、その行数の総計は9849行におよんでいる。編集の前半期すなわち1540年前後から70年代にかけて父ハリントンによって集められた詩232編(グループI)は、この詞華集全体のほぼ7割を占め、そこには、編者ハリントン(父)の自作の詩とともに、当時の代表的な宮廷詩人トマス・ワイアットやサリー伯ヘンリー・ハワードの作品が筆写されている。このグループIと呼ばれる詩の約8割(185/232)が、Hand Aと呼ばれる筆跡によって書き写されており、残りの2割が、Hand B(6/232)およびジョン・ハリントン自身の筆跡(41/232)である<sup>2</sup>。

一方、息子サー・ジョン・ハリントンによって編集された作品群は、全体(330編)のうち約3割を占め、計98編が掲載されている。グループIIとよばれるこの編集期後半には、編者サー・ジョン・ハリントン自身のほかに、サー・フィリップ・シドニー、オックスフォード伯ダ・ヴィアー、サミュエル・ダニエル、サー・ウォルター・ローリー、ヘンリー・コン

## 2 佐藤達郎

スタブル、エドマンド・スペンサーといった当代の詩人たちの作品が筆記されている。このグループIIの筆記者は、サー・ジョン・ハリントン自身とテューダー朝後期の筆跡を特徴とする複数の人物で、サー・ジョン・ハリントンに依頼されたハリントン家と縁のある筆記者 scribe であったと推定される<sup>3</sup>。

このように約60年の歳月をかけて編集された『アランデル・ハリントン写本』は、長年にわたり印刷本として一般読者の目にふれることはなかった。息子サー・ジョン・ハリントンの死後しばらくの間、この手稿本は、ハリントン家によって保管されていたが、19世紀の初頭、手稿本の収集家ジョージ・フレデリック・ノットが、ハリントン家の子孫ヘンリー・ハリントンからこれを買とり、それ以後『アランデル・ハリントン写本』の所在は不明となっていた (*AH*, Introduction 14–17)。ところが1933年、イギリス・ルネサンス文学の研究家ルース・ヒューイによって、この写本が、ノーフォーク公爵所有のアランデル城の図書室で偶然発見された<sup>4</sup>。おそらくノットの死後売りに出され、それをノーフォーク公爵が買いとったのであろう。ヒューイは、この写本の校訂を手がけ、その発見から27年後の1960年 *The Arundel Harington Manuscript of Tudor Poetry 2 vols.* を出版した。『アランデル・ハリントン写本』の成立からおおよそ330年を経て、はじめてこの詞華集の印刷本が刊行されたわけである。

この『アランデル・ハリントン写本』におさめられた詩のジャンルは、恋愛詩、風刺詩、『旧約聖書』の翻訳、謎詩など多岐にわたるが、その内容全体の特徴をあえて一言でいうとすれば、それが、作者の体験したある特別な機会をきっかけに作られた occasional poems の集合体であるということであろう。この詞華集の作者たちは、編者ハリントン親子と面識のあった宮廷人たちであり、その作品のほとんどが、宮廷内における人間関係や政治的事件など、作者たちが宮廷人としてじかに体験した特殊なコンテクストを念頭に置かなければ理解できないものである。つまり、この詞華集は、当時の宮廷人の人生体験を集約した一種のドキュメントであり、そこ

に収められている作品と作者の体験との結びつきがきわめて強いという性質を有している。第二の特質は、この詞華集が印刷本の場合とは異なり不特定多数の読者を念頭に置いているわけではないということ、つまりきわめて限定された読者のみを想定しているということである。この場合、限られた読者とは、編者自身を含むハリントン家のメンバーおよび同家と宮廷生活を共有した知人たちであるが、そうしたいわば閉じた集団のなかで、閲覧あるいは朗読されたと考えられる。

16世紀の中葉、ジョン・ハリントン(父)という貴族が、同時代の詩を集めはじめ、それがやがて一冊の詞華集となった。だがその編集の動機は何であったのだろうか。無論、先ほど述べたように、この『アランデル・ハリントン写本』は、当時の宮廷生活における体験の集積であり、それらをまるでアルバムに保存するように記録することは、それ自体ハリントン家にとって意義のあることであったであろう。しかしながら、この詞華集全体を通読したとき興味深いのは、そうした宮廷における日常体験の表象を恣意的に並べたというよりも、そこにはある一定の関心が伏在しているという点である。『アランデル・ハリントン写本』におさめられたさまざまな内容を含む詩作品は、この編者の一定の関心という存在によってより緊密に照応し、「間テキスト性」を生み出しているのではないか。本論では、こうした問いかけを手掛かりとしながら、特に父ジョン・ハリントンによって編集されたグループIの特質と歴史的意義を、作品中にしばしば使用される friend という語を分析することで検討してみたい。

グループIは、ジョン・ハリントンの詩の他に、サリー伯ヘンリー・ワードによる『旧約聖書』の翻訳(「詩篇」、「伝道の書」)、トマス・ワイアットのソネット、風刺詩、懺悔詩を中心に構成され、そこに共通してあらわれるテーマとして、(1)友情(friendship)(2)運命の変転(3)現実世界からの逃避(4)宮廷批判、などをあげることができる。なかでも friendship は、他のテーマとも緊密な関連をもつ重要なモチーフであり、そのことは、このグループIにおいて、friend という語が、派生語を含め、計152

回も使用されていることからあきらかである。次の引用が示すように、この“friend”の使用法の特徴は、多くの場合、“faithful,” “trust,” “steadfast”という語とともに使用されているという点にある。(以下、引用中のスペリングは全て modernize してある。下線部は全て筆者。)

(1) friend, friendship, friendly, faithful

All ye that friendship do profess  
 or of a friend presents the place  
 give ear to me that did possess  
 as friendly fruits as ye embrace  
 and to declare my case more plain  
 there were well skilled themselves did pain  
 to teach me truly how to take  
 a faithful friend for friendship's sake

-----  
 so I in time did learn to know  
 of all good fruits the world brought forth  
 a faithful friend was thing most worth (No. 18. 1-8, 14-16)

(2) friend, faith, steadfast

The steadfast faith that friends profess  
 is fled from them and little used  
 who doth so faithful friends possess  
 by whom he never is abused  
 where one is found a friend in dead  
 A score there be that fails at need (No. 305. 7-12)

(3) friend, faith, trust, steadfast

Whereto despaired ye my friends  
 My trust always in hid lie  
 that knowth what my thought intends  
 whereby I live the most happy  
 Lo, what can take hope from that hart  
 that is assured steadfastly  
 Hope therefore ye that live in smart

Whereby I am the most unhappy (No. 138. 9–16)

このグループIという編集期前半における、「忠実」で「堅固」な friendship への強い関心はなぜ生じたのか——このことを考えるうえで極めて重要なのが、『アランデル・ハリントン写本』の編集の開始とほぼ同じ時期に、編者ハリントンが、キケロー「友情について」(“The Book of Friendship”)を英訳しているという事実である。周知の通り、このキケローの友情論は、ラエリウスと小スキープオーの友情を例にあげながら、virtue にもとづく友情のみが、真の友情であること、さらに、それが社会の基盤となるべき要素であることを説いたものである。このハリントン訳の「友情について」に関しては注目したいのは、次の引用にみられるような、“faithful,” “steadfast” という語の頻繁な使用である。

Who therefore shall show himself in both these discreet, steadfast, and faithful in friendship, him ought we to judge of the perfect kind of men, and in a manner as a god. For the ground work of that steadfastness and constancy, which we seek to be in friendship, is faithfulness. For nothing is steadfast, that is unfaithful. . . . All which things belong to the faithfulness that ought to be in friendship. For neither can he be faithful, that will be in many minds, or that hath a turning head. Nor be steadfast and sure that is not of the same mode that his friend is, and agreeable to his nature. Hereunto must be joined, that he which shall be a friend, may not take pleasure in accusing, nor lightly believe accusations offered, which things belong to that steadfastness, whereof erewhile I entreated. And so cometh it to be true, which in the beginning I said that friendship cannot be but between good men. (Hughey 167)

引用の冒頭に「友情において、賢明で、堅固(“steadfast”)で、信義を示す(“faithful”)人物を、われわれは、もっとも完全な人間と判断しなければならない」とあるように、このキケロー「友情論」の英語訳と『アランデル・ハリントン写本』のグループIでは、双方に共通して faithful friend への

並々ならぬ関心が認められる。さらに後者の編集と並行して前者の執筆がすすめられていたことを考えた時、キケローの友情論がグループ I の編纂の指針に大きな影響を与えたことが推測されるのである。

ハリントンのキケロー訳の成立を考えるうえで留意すべきことは、それが、彼のロンドン塔での獄中生活に執筆されたという点である。ヘンリー八世の時代、王の私生児エサルリーダとの結婚を通じて宮廷人としての地位を確固たるものにしたハリントンは、エドワード六世の治下、宮廷において権力を掌握したシーモア家、とりわけトマス・シーモアに仕えた<sup>9</sup>。しかし、その後兄エドワード・シーモアとの権力闘争にトマス・シーモアが敗れると、ハリントンは、主人とともにロンドン塔に送られることになる。この獄中生活で執筆されたのが、キケローの翻訳であり、この翻訳をハリントンは、サフォーク公爵夫人キャサリン・ウィロビーに献上している。以下の引用は、このキケローの翻訳に付されたハリントンのキャサリン・ウィロビーに対する献辞の一節であるが、ここで強調されているのは、両者の間に成立する「変わることはない友情」(“steadfast friendliness”)である。

Thus when the thing was perfected, and I beheld the fame of the author, the nature of the treatise, and the clearness of his teaching, I could not judge to whom I should rather offer it, than unto your grace, whom the friendless daily find their defense, and the helpless repair to as a refuge . . . . And such your friendly steadfastness declared to the dead, doth ascertain us of your steadfast friendliness toward the living, which many have felt, and diverse do prove, and few can want . . . Thus the lord of truth preserve you in friendship, increase your friends, and defend you from enemies. (Hughey 138)

このハリントンとキャサリン・ウィロビーの *friendship* を成立させるうえで大きな役割を果たしたのが、キャサリン・パーであった。周知の通り、パーは、トマス・シーモアの妻であり、彼女の庇護する知識人サークルは

当時のプロテスタントイデオロギの普及に絶大な影響を与えていた。彼がケケロー訳を献呈したキャサリン・ウィロビーは、キャサリン・パーの熱烈な信奉者であった<sup>6</sup>。恐らくハリントンは、獄中からキャサリン・ウィロビーに *faithful friend* を主題とするケケローの翻訳を献呈することで、パーによって確立されたプロテスタントの連帯を呼びかけたのであろう。そのことは、キャサリン・ウィロビーに対する献辞を締めくくると、「真実の神があなたの友情を維持し、あなたの友人を増やし、あなたを敵からお守りくださいますように」 (“the lord of truth preserve you in friendship, increase your friends, and defend you from enemies”) という一節からも読みとれるのである。

ハリントンの、敬虔な宗教改革者 *reformer* であったことは、メアリー一世の治下、サー・トマス・ワイアットの反乱に加担したという咎で、王女エリザベスとともに、再びロンドン塔に送られたという事実からもあきらかである。『アランデル・ハリントン写本』におさめられた No. 19 は、ハリントンのこの二度目の投獄中に書かれた詩で、“Life is so lewd that all it yields is vain/ for as by life to bondage man was brought/Even so by death was freedom likewise wrought” (34–36) という詩句にあるように、カソリック体制への嫌悪と死への願望が如実にあらわれている。このような体験をもつハリントンが、『アランデル・ハリントン写本』の編集に際して、メアリー治下で迫害を受けた「メアリー時代の逃亡者たち (*Marian Exiles*)」の作品に関心をよせたことは当然であろう。周知の通り、ハリントンのケケローの英訳を献呈したキャサリン・ウィロビー自身が、やがて *Marian Exile* となるわけだが、『アランデル・ハリントン写本』においても、ジョン・アストリー (No. 296)、リチャード・エドワーズ (No. 239, 240, 288)、ジョン・チーク (No. 283–286) といった「メアリー時代の逃亡者たち」の詩が掲載されている。特にアストリーとチークは、ハリントンとともに、キャサリン・パーのサークルの一員であった。No. 283 と 286 は、チークによる祝婚歌で、結婚の称揚という体裁をとっているが、メアリーの治下 (“hap-

less age,” No. 283. 17) におけるプロテスタント同士の連帯の強化をうたったものである。これらの作品において使用される “bond,” “knot,” “knit” という語は (No. 283. 3, 286. 2)、前述の “faithful friend” とともに、キャサリン・パー・サークルにおいて成立したプロテスタント的友愛の精神を示すことばと考えられるのである。

『アランデル・ハリントン写本』における friend の使用法を考えるうえでプロテスタント的友愛とともに重要なのが、封建的人格関係にもとづく主人と臣下の絆という意味である。No. 2 は、ハリントン自身の詩で、「わが主人トマス・シーモアをうたうソネット」(“A Sonnet upon My Lord Admiral Seymour”) と題されているが、これは、シーモアがロンドン塔で処刑された際にうたわれた作品である。前述の通り、エドワード六世の治下に勢力を拡大したトマス・シーモアは、兄エドワード・シーモアとの確執の末、反逆の罪によって、臣下ハリントンとともにロンドン塔に送られた。次の一節は、獄中でつくられたそのハリントンの詩 (No. 2) である。

Of person Rare, Strong Limbs, and manly shape  
of nature fram'd to rule [serve] on Sea or land  
of friendship firm in good state and ill hap

-----  
A Subject true to King, and servant great  
friend to god's truth enemy to Rome's deceit (No. 2. 1-3, 7-8)

「神の真実に忠誠を示す友」(“friend to god's truth”)、 「ローマの偽りに対する敵」(“enemy to Rome's deceit”) という語句にあるように、ここでハリントンは、彼とトマス・シーモアが共有する連帯の意識として、プロテスタント同士の友愛を認めている。しかし、その一方で No. 2 の冒頭部で示されているのは、「壮健な肉体と雄々しい容姿をもつ類まれな人物シーモア」(“Of person Rare, Strong Limbs, and manly shape”) が、臣下につねに示した堅固な友情 (“friendship firm”) である。このような主人と臣下の間  
に成立する固いきずなは、続くハリントン作の No. 3 においてさらに具体

的にあらわれている。

None can deem right, who faithful friends do rest  
whilst they doe Rule, and Reign in great degree

-----

But if that wealth unwind and fortune flee  
as never known revolts the unfaithful guest  
but he whose hart, in life once faith linked fast  
Will love and serve, even after death is passed. (No. 3, 1-2, 5-8)

以下は、この詩の大意である。「主人が大いなる権力をもって支配しているときは、誰が忠実な友（臣下）であるかを正しく見極めることはできない。しかし、主人の富が失われ、幸運が逃げ去ると、これまで正体をあらわさなかった不実な輩は離反する。だが、信念と固くむすびつけられた心を持った者は、主人が生きているとき同様、その死後も、彼を愛し彼に仕えるのである」。「faithful,」「faith」という語が、「love and serve」という語句と密接に関連していることからわかる通り、ここでハリントンが使用している friend の意味には、庇護と恩にもとづいた封建的人間関係が暗示されている。このような主人と臣下の堅固な絆は、ハリントンがロンドン塔で取り調べを受けた際に、「常にトマス・シーモアと運命を共にすることを望んだ」という行動様式からも推測できるであろう (Hughey 29)。このように、ハリントンが亡き主人に対して用いる friend には、プロテスタント的友情と封建的絆という異なる意味が混在していると考えられるのである。

このような封建的人間関係を示す friendship の用法は、ヘンリー・グレイが在りし日のトマス・シーモアについて語った次の一節からも理解することができる。

[Seymour] used sundry times to show me as we rode together the country's round about saying all these which dwell in these parties be my friends. . . . And so he did vaunt . . . that he had as great a number

of gentlemen that loved him, as any noble man in England . . . And further said that he thought that he had more gentlemen that loved him than the Lord Protector [Edward Seymour] had and upon that he said he was happy that hath friends in this world that so ever should chance. (quoted in *DNB*, “Thomas Seymour”)

全盛期にあつてみずからの広大な領地を眺めながら、ここに住む者は皆 *my friends* であり、この世で *friend* を持つ者は幸いであると誇るシーモアの *friend* の用法は、プロテスタント的な友愛の意味とは異なり、むしろ No. 2 と No. 3 で用いられた伝統的意味に近いといえるのである。

このように『アランデル・ハリントン写本』における *friend* の用法は、ハリントンの使用法に顕著にみられるように、キケローの友情論の影響のもとにありながら、それをプロテスタント的友愛と封建的絆帯という二つの異なるフィルターを通して再解釈されたものだといってよい。しかしながら、次に注目したいのは、そうした *friend* という語が『アランデル・ハリントン写本』において時に否定的な意味を担うという点である。例えば、次の用例を見てみよう。

- (A) I could have hid my face, from venom of his eye/ It was a friendly foe/ by shadow of good will/ mine old fere and dear friend, my guide that trapped me (No. 84, 21–3)
- (B) the friendly foe with his double face say/ he is gentle and courtesy there with all (No. 104, 60–61)
- (C) for none is worse than is a friendly foe/ though they seem good all thing that the delighteth/ yet know it well that in thy bosom creepeth (No. 119 and 120, 3–5)

(A) はサリー伯ヘンリー・ハワード、(B) と (C) はトマス・ワイアットの詩からの一節だが ((c) は推定)、ここで共通して使用されている “friendly foe” は、「表向きは友情を示しながら彼らを裏切った政敵」を意味し、宮廷の派閥闘争におけるきわめて流動的な人間関係を示している。例えば、

(A) は、ヘンリー・ハワードが謀反の罪を着せられ、処刑の直前にロンドン塔で作られた詩の一節だが、スーザン・ブリグデンによれば、この場合“friendly foe”とは、ハワードを裏切り処刑へと追い込んだグループ、ジョージ・ブラージュ、リチャード・サウスウェル、エドモンド・ニヴェットといった宮廷内の政敵であると推定されている (Brigden 537)。同じくグループ I で使用されている“unfaithful friend,” “secret foe” (No. 247. 22; No. 321. 32), “transformed into my foe” (No. 18. 46) という語句も、この“friendly foe”と同義と考えてよいであろう。

このような『アランデル・ハリントン写本』のグループ I における friend に対する懐疑的視線は、中央集権化の過程にあって、貴族たちの利害が宮廷に集中し、その結果貴族たちの派閥争いが激化したことに由来していると考えられる。例えば、作者不詳の No. 256 における、“A River that divided us/ in Sundry streams can have no strength” (3-4) という一節は、そうした派閥争いによって中央集権国家が弱体化していく事態をしめすものである。前述のハリントン作 No. 2 において、friend が彼とトマス・シーモアに成立するプロテスタント的友情と封建的結束の混合を意味するのに対し、No. 3 で使用されている friends という語句は、トマス・シーモアの没落後、彼に敵対するエドワード・シーモアへの臣下へと変節した一団、すなわち政治的“faction”の意味に近い。この点、先に引用したトマス・シーモアの friend という語自体に (みずからの領地を眺めながら、「ここに住む者は皆 my friends である」という使用法)、封建的人間関係とともに、宮廷内の派閥という第三の意味が混在していることは否定できない。言い換えれば、こうした権力闘争に伴う宮廷内の政治的かつ流動的な人間関係は、プロテスタント的友愛や封建的絆帯と並置されながら、“friend”の意味を多義的で複雑なものにしているのである。

これまで『アランデル・ハリントン写本』における friend の多義の意味、プロテスタント的友愛、封建的絆帯、宮廷内の派閥、を考察してきたが、最後に『アランデル・ハリントン写本』の成立を検討する上で極めて重要

な「連帯の意識」friendshipを検討してみたい。それは、『アランデル・ハリントン写本』に収められた宮廷詩人に対する、編者ハリントンが抱く共感の意識といってもいいであろう。先に述べたとおり、ハリントンは、エドワード六世とメアリー一世の時代に二度の獄中生活を体験しているが、興味深いことに、彼が編集したグループIには、一般に“prison poems”と呼ばれる、宮廷人たちが投獄中に創作した作品がきわめて多い。以下は、『アランデル・ハリントン写本』のグループIに掲載された“prison poems”である。(1) ヘンリー八世の治世：(a) トマス・ワイアット、No. 154-167, 310; (b) サリー伯ヘンリー・ハワード、No. 74, 75, 79-84, 86-90. (2) エドワード六世の治世：(a) ジョン・ハリントン、No. 2, 16, 19, 20; (b) トマス・シーモア、No. 291; (c) トマス・スミス、No. 323. (3) メアリー一世の治世：(a) ジョン・ダドリー、No. 289; (b) ロバート・ダドリー、No. 290. (4) エリザベス一世の治世：エドモンド・キャンピオン、No. 66. ここで注目すべきは、こうした一連の“prison poems”の作者たちが、必ずしも編者ハリントンと宗教的・政治的イデオロギーを共有した人物ではないという事実である。例えば、トマス・ハワードは、ハリントンの主人トマス・シーモアと敵対関係にあり、トマス・スミスは、ハリントンが最初に投獄された時、政敵として彼をロンドン塔で尋問した人物である。カソリックの殉教者としてエドモンド・キャンピオンが、ハリントンと宗教的見地から対立していたことは指摘するまでもないであろう。ハリントンが、政治的宗教的信条をこえて、彼らの作品を収録したのは、おそらく“sundry storms of strife” (No. 16, 14) という激動の時代にあって、獄中生活という運命をともにした宮廷人たちへの共感からであり、そのことは、生前ハリントンが、キャンピオンの“prison poem” No. 66を「最良の英詩」と評していたことから推測されるのである。

このような“prison poems”を検討する上で重要なことは、これらの作品に伏在する、“tyranny”への批判、すなわち王権の不当な行使に対する、獄中者たちの抑圧された意識である。例えば、トマス・ワイアット No.

154-167 は、『旧約聖書』のダヴィデによる懺悔詩 psalm をもとに作られた作品であり、ダヴィデが洞窟にこもり、かつて抱いた人妻バテシバへの情欲を悔いるという設定になっているが、実はこの設定は、ロンドン塔に投獄されたワイアットが自らの罪の許しをヘンリー八世にこいねがうという実体験と重なり合っている。主人トマス・クロムウェルの失脚の後、宮廷におけるワイアットの地位は極めて不安定なものとなっていたが、ここでのワイアットの罪とは、ハプスブルグ家との外交交渉の失敗、さらにはヘンリー八世に対して「不敬なことば」をはいたという容疑であった (Walker 338, 375)。しかしながら、このワイアットの懺悔詩の特徴は、ダヴィデ/ワイアットが、神/ヘンリー八世に許しをこいながらも、次第に、後者の権力の行使に疑問を突き付けていくという点にある。例えば、もし自分の罪を許さなければ、「尊敬ではなく、恐れが広く支配するだけである」 (“Dread and not reverence/Should so reign large” No. 165. 16-17) という語句には、あきらかにヘンリー八世の不当な権力行使と恐怖政治に対する批判がこめられているのである。このように宮廷から排除されロンドン塔に送られた貴族が、懺悔詩において、王権の不当な行使に対する不満を表明するというもう一つの例が、No. 289 である。これは、ジョン・ダドリーが、メアリー一世の即位後、ロンドン塔に送りこまれた時書かれた詩だが、ここでも、「わが没落を喜ぶ邪悪な宮廷の輩たち」 (“the wicked swarming flocks/ that at my fall rejoice”) への呪詛とともに、そうした状況を容認する tyrant に対する批判が暗示されているのである。

Give ear to me my god/ and hear my mourning voice  
break down the wicked swarming flocks/ that at my fall rejoice

.....

But I appeal to thee/ that will when fit time is  
Discharge my fraughtfull breast of woe / and pour in heaps of bliss  
And send consuming plagues/ for their deserts most due  
That thirst so sore my guiltless blood/ their tyrants hands t'imbrue

(No. 289, 1-2, 27-30)

トマス・ワイアットやジョン・ダドリーの創作状況にみられるように、『アランデル・ハリントン写本』における prison poems は、獄中生活における抑圧を文学作品に転化したものと言ってよいが、テューダー朝における prison poems の系譜を考えたとき、これらの詩は、1600 年代初頭にエセックス伯ロバート・デヴァルーによって書かれたと推定されている prison poem (“The Passion of a Discontented Mind”) へと繋がっていく。周知の通り、反乱後ロンドン塔に投獄されたエセックスが、「懺悔詩」という形で、エリザベス一世に対して罪の許しを乞うという体裁をとっている。しかしながら、トマス・ワイアットの「懺悔詩」と同様、そして「不満の情」というタイトルに示されているように、ここで暗示されているのは、王権の不当な行使に対する反発である。“From silent night, true register of moans,/ From saddest Soul consumed with deepest sins, . . . My wailing Muse her woeful work begins (1-4)” とあるように、この詩の冒頭では、エセックスの大罪を悔いる姿勢が示されている。だが、ステイーヴン・メイが指摘しているように、その改悛の情は、やがて、自分の罪を許してあげなければ、プロテスタントからカソリックに変節する可能性を示すエリザベスに対する挑発へと変貌し、さらにその挑発は、“I may see what tyrants have me slain” という “tyrant” 批判へと発展していく (222)。この場合、“tyrants” とは、第一義的には、“ruffian,” “villain” (OED 4.b) という罵倒をこめた意で、彼をおとし入れた宮廷の政敵たちを意味すると考えられるが、前述のエリザベスに対する挑発的な態度を考えると、ここでも、この “tyrants” の使用には、王権の不当な行使に対する批判が暗示されている可能性が高いのである。

1549 年トマス・シーモアとともにハリントンが最初の獄中生活を体験した時、ロンドン塔は、トマス・ハワード、ステイーヴン・ガーディナー、ジョン・フェクナムといったカソリック教徒にあふれていた。その後、ト

マス・シーモアを牢獄に追い込んだ兄エドワード・シーモアが、ジョン・ダドリーの奸計により失脚すると、エドワード・シーモアとともにトマス・スミスがロンドン塔送られた。スミスはハリントン同様プロテスタントであったが、前述の通り、数か月前ロンドン塔で体制側としてハリントンを尋問した政敵であった。さらにハリントンの二度目の獄中生活においては、エドワード・シーモアを陥れたジョン・ダドレー自身が、投獄されている。ヒュージは、ハリントンが、こうしたカソリック教徒や政敵たちとともに獄中生活を送るにつれ、彼らの間にさまざまな交流があった可能性を指摘し、獄中生活の中で書かれたハリントンの翻訳キケロー「友情論」の完成にあたって、以前の政敵トマス・スミスがその推敲を重ねた可能性を示唆しているが (Hughey, 31, 33)、そのスミスが、後年“tyranny”批判の理論的根拠となるリパブリカニズムを唱え、*De Republica Anglorum* (1583) を著したことは、記憶に留めておくべきことであろう。

これまで『アランデル・ハリントン写本』における friend の重層的意味、すなわち (1) プロテスタント的友愛、(2) 封建的絆帯、(3) 宮廷内の派閥、(4) 政治的宗教的信条を超えた反“tyranny”という連帯、について論じてきたが、最後に留意すべきは、このような friend に対する関心が、1540年代前後から70年代、つまりヘンリー八世の治世からはじまる絶対主義国家という体制の本格的始動と同時期に生じているという点である。絶対主義が、国家権力のもとに国民の連帯の意識 (friendship) を奨励するイデオロギーであるとするれば、『アランデル・ハリントン写本』にみられる四つの friend の意味は、すでにそうした中央集権的な力では制御できない意味を有し、それぞれが、絶対主義的連帯の意識と対立する潜在力を秘めている。例えば、(1) の「プロテスタント的友愛」は、政教未分離の絶対主義国家を理論的に支える役割を果たしながら、その一方で、神と個人の直截的な結びつきを通して、王権批判に対する一定の役割を果たしていったことは指摘するまでもないであろう。あるいは (3) の「宮廷内の派閥」は、ジョン・ハリントン (父) の作品 No. 2 と 3 におけるように、(2) の封建的絆帯

と対立しながら否定的意味合いを帯びていたが、その一方で、歴史の実体としては、後者を吸収しながら、王権に対抗しうる力を保持していった。エリザベス朝初期において、ロバート・ダドリーが、一族郎党的な絆帯を基盤としながら、宮廷内の派閥の長として、自らの政治的勢力を拡大させていった手法には、(2)と(3)の融合を認めることができるであろう。又、(4)の「反“tyranny”を共有する連帯」は、1590年代の政治思想や文学作品における、タキトウスの流行と結びついたリパブリカニズムの影響や中央政府に対する批判に直結するものである。前述のエセックス伯がエリザベス政権末期に、中央政府に反旗を翻した要因として、(A)強硬なプロテスタンティズム路線を標榜していたこと、(B)継父ロバート・ダドリーの派閥拡大路線を継承したこと<sup>7</sup>、(C)リパブリカニズムを政治的行動の理論的根拠にしていたこと<sup>8</sup>、を考えたとき、権力の中枢とは一線を画した連帯に対する関心が、すでに『アランデル・ハリントン写本』の成立時にあらわれていたことは注目すべきことであろう。近代初期に創出された国家権力と個人との間に、国家とは一定の距離をおいた連帯を措定すること——絶対主義国家という体制の本格的始動とともに、そうした friendship への関心をテーマとする詞華集が、手稿本の回覧という形で、ひそかに宮廷の一部で読み継がれていたという営為は、その後のテューダー朝文学の反体制的側面を検討する上で見逃してはならないことなのである。

#### 註

1 本研究にあたり、*The Arundel Harington Manuscript* の閲覧を許可していただいた、第18代ノーフォーク公爵 Edward William Fitzalan-Howard 氏と、閲覧の際にご助力いただいた Archive Assistant の Margaret Richards 氏に謝意を表したい。

2 グループ I の筆跡に関しては、*AH*, Introduction 29–36 を参照。

3 グループ II の筆跡に関しては、*AH*, Introduction 29–33 を参照。

4 *The Arundel Harington Manuscript* の発見の経緯については、Ruth Hughey, “The Harington Manuscript at Arundel Castle and Related Documents.” *The Library*. 4th ser., 15 (1934–5): 388–444. を参照。

5 本文中の John Harington の生涯に関する言及については、Ruth Hughey, *John Harington of Stepney: Tudor Gentleman*. Ohio: Ohio State UP, 1971. 3–81 および *DNB* を参照した。

6 Katherine Parr Circle に関する詳細については、Janel Mueller, “Katherine Parr and Her Circle.” *The Oxford Handbook of Tudor Literature, 1485–1603*. Ed. Mike Pincombe and Cathy Shrank. Oxford: Oxford UP, 222–237. を参照。

7 エセックスがダドリーの派閥拡大路線を継承していったことに関しては、Paul. E. J. Hammer, *The Polarisation of Elizabethan Politics: The Political Career of Robert Devereux, 2nd Earl of Essex, 1585–1597*. Cambridge: Cambridge UP, 1999. 269 を参照。ロバート・ダドリー自身の派閥形成については、Simon Adams. *Leicester and the Court: Essays on Elizabethan Politics*. Manchester: Manchester UP, 2002 の Chapter 9 “A Puritan Crusade? The Composition of the Earl of Leicester’s Expedition to the Netherlands, 1585–86” 176–95 を参照。

8 例えば、エセックス・サークルの間で回覧され、その政治的行動の理論的根拠となった Henry Wotton, *The State of Christendom: Or, a Most Exact and Curious Discovery of Many Passages, and Hidden Mysteries of the Times*. 1657 の存在が考えられる。この問題については、Hammer 338–9 を参照。

#### 引用文献

*The Arundel Harington Manuscript of Tudor Poetry*. Ed. Ruth Hughey. 2 vols. Ohio: Ohio State UP, 1960.

Brigden, S. “Henry Howard, Earl of Surrey, and the ‘Conjured League.’” *HJ* 37 (1994): 507–37.

Hughey, Ruth. *John Harington of Stepney: Tudor Gentleman*. Ohio: Ohio State UP, 1971.

May, Steven W. *The Elizabethan Courtier Poets*. Columbia: U of Missouri P, 1991.

Walker, Greg. *Writing under the Tyranny*. Oxford: Oxford UP, 2005.